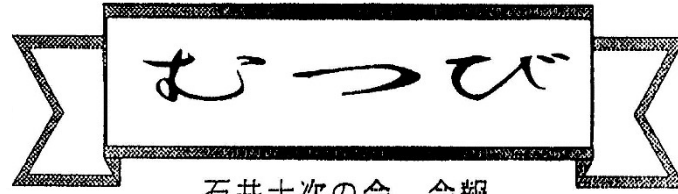


2020年
(令和2年)
8月12日



275号

石井十次の会 会報

愛ある学校づくりや命を大切に育てる石井十次の生き方から学ぶ
～ 子どもたちに伝えたい、今の時代だからこそ ～

木城町教育長 恵利 修二

まず、はじめに伝統ある石井十次の会 会報「むつび」の原稿依頼を頂きましたことに感謝申し上げますと共に、郷土の偉人、石井十次の生き方や生き様を改めて知る機会を得ましたことに喜びと感動を得たところです。

既に「孤児の父」としての有名な石井十次像がありますが、資料や読み物を通して、夢を描きながらいくつもの困難を乗り越えて、大きな理想社会づくりのために多角的に挑戦する郷土の偉人としての人間像を、この機会を通して理解することが出来ました。正に夢追う鉄人、オールラウンドプレイヤーとしての十次像を知ることが出来ました。

出会いが人生を決定づけると言われますが、ある人との出会いが十次の人生の大きな岐路となり、人生を決定づけることとなったことが分かりました。それは、医師になることと孤児救済事業をすることの葛藤の中で、同じように孤児を引き取って育てている方との出会いやある親子の出会いがあり、「孤児や貧しい子どもを救うというのは、母と子を救うということなのだ」ということに気付き、孤児教育に全力を傾けていく大きな決断をしたのでした。本人の英断に至る葛藤はもちろんです、この決断は父万吉、母乃婦子のご両親から学び受け継がれたものであることも理解することが出来ました。

父は体が大きく、負けず嫌いで強い信念をもち、貧しい家を建て直し、母は働き者、優しく穏やかで実行力があり、教育方針は「当たって砕けよ」で、特に母は恵まれない家庭に衣類や品物などを届ける等、十次はそんな母を誇りに思い、幼少の頃から恵まれない友達を助けるのは義務であると思うようになり、慈善の精神はこんな少年時代に芽生えたのでした。これは、偉大な両親から受け継いだ素晴らしい宝物であり、正しく今大事にすべき家庭教育の大切さを強く感じる事が出来ました。少年時代にいじめられていた縄の帯を締めていた子どもと自分の着物の帯を交換して、その子を誘って、みんなといっしょに遊べるようにしてあげた逸話は、道徳の副読本資料にもなった有名なお話です。

また、岡山孤児院を営むようになった十次が、孤児の健全育成を目指した独自の法則を確立したことは、先駆的、先進的なものだったことでしょう。はじめは、十次であっても、生活習慣が身につかなかった子どもたちに対してはきびしくしつけるために体罰を加えたり、院を辞めさせたりしたのですが、奥様品子さんとの間に女の子友子が誕生したころから、満腹主義非体罰主義を含む教育法「岡山孤児院十二則」をつくりあげました。体罰ありきの躾や教育が当たり前だった当時としては、画期的先進的な教育方針であり、現代の人権意識に通じるものだったと言えます。

さらに、十次と少年が相對している写真が今でも残されている「二人だけの対面指導」

の「密室教育」は、今で言うカウンセリングや個別指導につながるものと考えられます。

また、岡山孤児院に「東洋救世軍」を結成し、その直後に起きた「濃尾震災」の被災地に対して、この「東洋救世軍」を派遣し、孤児救済や義援金募集活動を展開しました。これは、今の時代の災害被災地を救済するためのボランティア活動の始まりだったのではないのでしょうか。十次は正に今、大切にされているボランティア活動やその精神の先駆者だったのではないのでしょうか。

先進的な挑戦は、他にもあって、茶臼原に孤児院を設立することを決定、この事業は「郷土高鍋を救済することになる」として、茶臼原事業を地域振興事業と一体化させて構想したことは、今でいう地域づくりや地域活性化の考えに通じるものでありました。

さらに、活版部、農業部、商業部など多岐にわたっている事業を興しながら、他に頼らず自治的経営の努力をしたことには、経営者の才覚も大いに感じると共に、孤児による岡山孤児院音楽隊を編成し、郷土高鍋などで、音楽会を開催するなど文化活動にも力を入れていたことには感心させられます。後に、大隈重信邸や家族会館など東京での著名な場所での音楽会が開催されるまでにもなり、注目を集めるまでになったことは、十次が全国的にも認められた存在であったことが証明されます。さらに、岡山孤児院は、藍綬褒章が授与され、日本で最も有名な実績のある孤児院となったのでした。

その後、東北地方の大凶作に伴う、救済活動に取り組み、1200名を超える孤児が岡山孤児院におりました。その後、茶臼原を自然豊かな「エミールの谷」と呼び、そこで孤児をのびのびと育てることとし、明治四十一年、十次は「理想農村」づくりを茶臼原で開始し、茶臼原に移転をしました。その間の「岡山孤児院尋常高等小学校」や「茶臼原農業小学校」開設など、学校教育制度を確立したことについては、十次の孤児を人としてどう育てていくかという教育者としての情熱も感じたところであります。大正二年、十次は「茶臼原憲法」を発表し、翌三年、四十八才で激動の生涯を終えました。短い人生ではありますが、孤児救済の歴史においては、とても大きな功績を残され、その思いは現在の友愛園においても脈々と受け継がれているものだと思います。

現在、家庭教育は弱体化し、虐待件数も大幅に増加するなど、恵まれない家庭環境の中で、健全に育てられていない子どもたちも確実に増加しているのも現実であります。現に、私も現役の学校職員時代に、友愛園やその他の児童養護施設に入所した子どもが、教育力が欠如した家庭から逃れ、安定して落ち着いた生活環境の中で育てられることで、その子の生きる権利が保障され、大きく成長して変容していく様子をうかがったこともありました。このような時代だからこそ、児童施設はこのような恵まれない子どもたちを救う場であると考えています。

令和5年に、木城町は義務教育学校を開校いたします。その中では、郷土を学ぶカリキュラム「ふるさと学習」を実施します。郷土の素晴らしさから、自分の生き方につなげる学習です。そこでは、郷土の偉人として「石井十次」の生き方を学ぶ機会をぜひ設けながら、その学びをお手本にしながら、自分の生き方を考えていくなど計画していきたいと考えています。また、十次が残した「人類愛」「生命尊重」の精神は、この義務教育学校の校風や学校経営の根幹に据え、受け継いでいきたい精神だと考えています。

※ 参考資料「石井十次物語」 著者 松本こーせい 編集者 高鍋町教育委員会

荻原百々平との出遇いは十次の一生に決定的な影響を与えた。岡山医学校に入学し、キリスト教に入信したのは荻原の勧めによるものであった。

1. 十次、巡査時代の義侠心

父・万吉は血気さかな十次が挫折を繰り返すのを憂慮していた。15歳で海軍士官を夢見て入学した東京の攻玉舎は、脚気のため1年で退学。友人と開墾した唐瀬原からは水利権が得られず撤退した。

明治15年、万吉は県庁時代の旧友・郡司盛武が県警察署長になると、18歳の息子を警察で雇ってくれるよう頼みこんだ。十次は巡査に採用された。ある日彼は署前を悄然として往来する若い女性に気がつく。調べると彼女は市内の松山遊郭の娼妓で、しかも攻玉舎時代の友人の妹であることが分かる。

持ち前の義侠心を発揮した十次は、彼女のために金策に奔走し、苦界脱出の資金15円を調達した。彼女は救われて国元に帰った。しかし十次には大きな負債が残った。多額の借金と性病への罹患である。

2. 十次、医師・荻原百々平と出会う

慌てた十次は、公立宮崎病院で医師・荻原百々平の診察を受ける。荻原は高鍋出身で、宮崎駆梅院に勤務した経験もある専門医だった。荻原は同郷の熱血漢・十次のことを知っていた。

荻原は十次に言った。「お前さんは何の病気にかかっているか知っているのか。女遊びをした罰が当たったのだ。若いくせにこんなことでどうなる。病気は治してやる。心をいれかえて医者になれ。3年間学資を買いでやる。医学を学ぶか」

気迫に押された十次は「生まれ代わった気持ちで、医学を勉強します」と返事をする。

荻原はさらに、「聖書は心病の良薬なり。君よ、岡山に行くべし。岡山はキリスト教も盛んにして、医学校も良なり」と勧める。「家は大工が造り、時計は時計師が造る。天地宇宙は神が造られた。人は何よりもまず、その神を信ぜねばならぬ」という一風変わった有神論と、彼の容貌魁偉さが相まって、十次の心をゆさぶった。十次はこの年の9月に岡山県甲種医学校に入学する。岡山の牧師・金森通倫に会ってキリスト教の洗礼を受ける。荻原は約束通り俸給を割いて学資を十次に送った。

3. 十次を支え続けた荻原百々平の生涯

荻原百々平は安政3年（1856）9月、高鍋村・筏いかだに生まれた。家業の藩医を継いで、明治2年から医師・坂田栄に外科学を学ぶ。明治5年に鹿児島県病院附属医学所で、イギリス人・ウイリスに解剖学、生理学、内科学、外科学、産科学を学ぶ。ウイリスは文久2年（1862）英国公使館付医官として来日。鹿児島県から招かれて明治3年から鹿児島で教鞭をとった。県内外から300人を超える医学生が入門し教えを受けた。荻原百々平もその一人であった。荻原は明治13年、宮崎医学所教授となる。十次との出遇いはその後である。明治16年、宮崎市内に日向病院を設立。明治23年および27年には第2代および第5代の宮崎県医師会長をつとめ、宮崎県の医療行政に貢献した。昭和3年（1928）病没。享年73。

石井十次は荻原百々平を心から尊敬し、「閣下」と呼んだ。学資には必ず領収書を書いた。十次が馬場原朝晩学校の遊学生5人を引き受けたとき、生活費が足りず、学資の増額を頼んだが、荻原は断った。「石井君が岡山に遊学するにつき、自分は俸給12円の3分の1、すなわち4円を割いてその学資に提供した。ところが更に増額を望んできたので、自分は出来るだけの加勢かせいをしているのだから、それで不足なら按摩あんまでもして補うがよい、と返答した。まさか按摩は出来まいと思っていたら、それを実行したのには驚いた」十次の有名な「目あき按摩」は、荻原百々平の示唆によるものであった。

（参考資料：信天記 西内天行著、石井十次 黒木晩石著、高鍋キリスト教史叢 横川澄夫著）

（編集委員 石川正樹）

《 お し ら せ 》

★新会員のご紹介（敬称略）

【高鍋町】 池内 誠治

【宮崎市】 (株)フジネットシステム

【延岡市】 藤本 兼男 佐藤 民男

★ご寄付をいただきました（敬称略）

【岡山市】 叶原 土筆

【鳴門市】 宮城 正行

★6/21～7/20の資料館来館者

団体・グループ

【延岡市】 北方民児委員 15人

【大分市】 大在民児協 20人

【宮崎市】 宮崎県議会議員 11人

個人 14人 合計60人

ここまでの掲載者は編集委員会開催の都合により7月20日までのものとしています。

★9号の通信発送作業

9月10日（木）9時から印刷・製本

11日（金）9時から製本・発送

この会報は、宮崎県を中心に全国 1700余の個人・団体に毎月送付しています。

社会福祉法人 石井記念友愛社

☎ 884-0102

宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1

後援会「石井十次の会」

TEL/FAX 0983-32-4612

メール

yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

●友愛社の創立記念日を7月5日開催

茶臼原墓地で雨天にもかかわらず約200名の参列の中で開催。正式名称は「児嶋虬一郎・登美記念式」。

石井記念友愛社の創立者である児嶋虬一郎氏の命日である7月10日に近い日曜日に子どもたちも参加できるように配慮しての開催。

ご夫妻が戦争孤児の救済目的で「石井記念友愛社」を設立したのは終戦直後の10月。

戦後75年と軌を一にして「石井記念友愛社」も歴史を刻んでいることになる。

司式役の高鍋協会 松井初牧師も児嶋草次郎理事長も「子どもの教育こそが社会の礎である」趣旨の話を熱くされた。

創立の理念を再確認するひとときとなりました。



児嶋虬一郎之墓



★雨天用テントとコロナ禍でのマスクと編集後記

「むつび」巻頭は木城町教育長の恵利

修二様から玉稿をいただきました。

ありがとうございます。

・・・文責 竹

之下

